
企画セッション

[CP2] 大会企画セッション2
医療におけるビッグデータ－医療情報学はどう関わってゆくの
か、何をなすべきか－

2018年6月23日(土) 13:25 ～ 14:55 第1会場 (2階・メインホール)

[CP2] 医療におけるビッグデータ－医療情報学はどう関わってゆくの
か、何をなすべきか－

奥田 修二郎¹、畠山 豊²、河添 悦昌³（1.新潟大学大学院医歯学総合研究科 新領域開拓研究センターバイオイン
フォーマティクス分野、2.高知大学医学部附属医学情報センター、3.東京大学医学部附属病院 企画情報運営部）

大会企画セッション 2

医療におけるビッグデータ ー 医療情報学はどう関わってゆくの、何をなすべきか ー

座長：奥原 義保 （高知大学医学部附属医学情報センター）

演者：奥田 修二郎（新潟大学大学院医歯学総合研究科
新領域開拓研究センターバイオインフォマティクス分野）

畠山 豊 （高知大学医学部附属医学情報センター）

河添 悦昌 （東京大学医学部附属病院 企画情報運営部）

今や、ビッグデータという言葉を書かない日がないくらいこの言葉は世の中に溢れ、情報関連の世界で最もホットなトピックスになっている。しかし、その多くは「一見、説得力があるように見えるが、具体性がなく明確な合意や定義のないキーワード」や「何だか凄そうだ（と感じられる）けれど、曖昧で、よく分からない」（知恵蔵より）言葉、すなわちバズワードとして語られているようにも思われる。

ビッグデータの簡潔で正確な定義は、悉皆性と網羅性を満たし、統計的有意性やバイアスを気にする必要が無い母集団に近いデータということであろう。とは言え、悉皆性や網羅性を厳密な条件とすると、現時点ではまるデータは、それほど多くないと思われる。とりわけ、医療データではほとんどないと考えられる。

そのため、この企画セッションでは、ビッグデータを、極めて大きなサンプルサイズのデータまたは極めて大きな次元を持つデータ、という少しあいまいな定義で考える。

そのように考えた時、医療に関係したビッグデータとしては、Omics、医用画像、EMR といったカテゴリーが思い浮かぶ。医療情報学のこれらへの関わり方としては、データの収集・管理の方法、必要なインフラの構築、データの解析などが考えられ、既に多くの医療情報学分野の人が、実際にインフラ構築やデータの管理・抽出といった面に関わっていると思われる。しかしながら、それらは、本来何をどう解析するかが定まらない限り決まらないはずである。解析の方向性を決めるにあたっては、電子化された医療データに最も深く関わっており、そうしたデータの性質を最も良く知っているはずの医療情報学分野の人間がイニシアチブを取るべきではなかろうか。現状は果たしてそうなのだろうか。魅力的なデータ解析の分野が広がっているのに、見逃していないだろうか。

このような問題意識に基づき、このセッションでは、データ解析の視点から、3つのカテゴリーについて関わりの深い3人の演者にパネラーとして、それぞれのカテゴリーについてその概要と課題について簡単に紹介してもらい、後半ではフロアーからの質疑も交えて、現状や3カテゴリー間の関係も考えながら、今後の医療情報学とビッグデータの関わりかたの可能性を考えたい。